

和歌

瀬乃まゝて

うゑ方
羽を
雑魚

911.1

八

懷のまゝにまゐる上は録

寄天邊

寄日

寄月

寄原

寄雲

寄烟

寄霞

寄芳

寄雨

寄霜

寄露

寄雪

寄曉

寄朝

寄暮

寄夜

寄山

寄巖

寄谷

寄水

寄社

寄野

寄原

寄田

寄林

寄水

寄泉

寄溪

寄江

寄江

寄海

寄河

寄湖

寄湖

寄海

寄湖

寄海

寄海

寄海

寄海

寄海

寄海

寄海

寄海

寄海

寄海

寄海

寄海



寄都

懷のふさふさ上目錄

寄天戀	寄日	寄月	寄星	寄風
寄雲	寄烟	寄霞	寄芳	寄露
寄雨	寄霜	寄霞	寄雪	寄露
寄曉	寄朝	寄畫	寄夕	寄夜
寄山	寄巔	寄谷	寄園	寄松
寄杜	寄野	寄原	寄圃	寄道
寄橋	寄水	寄泉	寄溪	寄池
寄江	寄江	寄瀧	寄河	寄湖
寄瀨	寄瀨	寄海	寄湖	寄浦
寄濱	寄磯	寄汀	寄磯	寄嶋
寄傳	寄泊	寄渡	寄岸	寄石
寄沙	寄巖	寄田	寄都	寄禁中

寄里	寄市	寄巷	寄門	寄戸
寄垣	寄庭	寄井	寄屋	寄庇
寄柱	寄簷	寄窓	寄末	寄垣
寄目	寄隣	寄扉		

讀のてふこ 戀の

物忌 忍 不吉 物言 歌 聞 死 祈
 乃 若 立 立 無 名 池 人 情 久 経 年
 不 逢 契 誓 誓 難 嘆 待 逢 稀
 別 後 朝 語 切 思 片 思 賦 悔 忘
 絶 愛 恨 恨 四 戀 命 夢 老 切 書
 遠 近 旅 戀 而 秋

已上歌讀方詞木初尋寄式かろて此定寄意といふ
よるる

凡寄忌其物よりきて忌られぬ事あるもより事には
 淡くしてよるる忌の心よりよるる忌の心
 淡く入るる忌の心より忌られぬ事あるもより事には
 の忌なりといふ一又其下を忌みえんある物よりきて

... ..
... ..
... ..
... ..
... ..
... ..
... ..

... ..

... ..
... ..
... ..
... ..

... ..
... ..
... ..
... ..
... ..

... ..

... ..
... ..
... ..
... ..
... ..
... ..
... ..

寄露魚

[illegible]

とびてもうひたまたま・あつてしるゝんまのあに派小ち也
其外社のあまもせてハ・社のあまをいきて月のとらると
も・んより社社のあ・うさまで一社二社のあ・わうはく
あつてその社のあかともして
縁初ハ・よく・むじふ・きりや・こころ・さゆふ・そう
ありふ・こころ・社なす・あまする

寧南

[illegible]

いふれぬふくふ人乃とれんまゝに。まのちのち
と一編ふくふら。其のあひだのさ。あひだの
の素氣をふくふてもふくふてふくふて

赤の魚

耕を向ふ乃とれんまゝに。物よりまゝそはさぬ。地を
起すれりいふふくふぬ。あひだに。まゝに。まゝに。
この赤も起す。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。
赤の乃も起す。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。
まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。
まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。

赤の魚

赤の乃も起す。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。

凡て赤の乃も起す。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。
まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。
まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。
まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。
まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。

赤の魚

赤の乃も起す。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。

凡て赤の乃も起す。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。
まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。
まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。
まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。
まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。まゝに。

うんーうんーと相違ふ・入道のひらひらとも物さげーさ・サ
 日の中の人えりし物哉　あひてさうさなるんの人めもつ
 うーん

[illegible][illegible]

松崎の好なりし川と云ふ雖もあつたといひてや
 入寄山をよみては初志未だ侍不違怨恨を治す其介され
 の意小いせしむるに・入せり・此の言は子ほうふ・入そめ
 い入人のなくんあつし・このうつく金河ぶのをれ・おさう

Handwritten text in a cursive script, likely Persian or Arabic, enclosed in a rectangular border. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines. The script is dense and flowing, with some characters appearing to be stylized or abbreviated. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in a cursive script, likely Persian or Arabic, enclosed in a rectangular border. This section contains approximately 5 horizontal lines of text. The script is consistent with the one in the top section, showing a continuous flow of writing.

Handwritten text in a cursive script, likely Persian or Arabic, located below the main body of text on the right side of the page. It appears to be a short phrase or a signature.

Handwritten text in a cursive script, likely Persian or Arabic, enclosed in a rectangular border. This section contains approximately 8 horizontal lines of text. The script is consistent with the one in the top section, showing a continuous flow of writing.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, slightly discolored paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory.

Handwritten text, possibly a signature or a date, located below the main block of text.

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or series of entries. The script is consistent with the one above.

Handwritten text, possibly a signature or a date, located below the main block of text.

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or series of entries. The script is consistent with the one above.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, slightly discolored paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory.

Handwritten text, possibly a signature or a date, located at the bottom of the page.

Handwritten text, possibly a signature or a date, located at the bottom of the page.

[illegible]

齊濟堂

[illegible]

くる滝の音が・わきとくさのこい・滝のまのたよりを
 別所かといふ・わきとくさのこい・わきとくさのこい
 ありありとくさのこい・わきとくさのこい・わきとくさのこい
 別所か・わきとくさのこい・わきとくさのこい・わきとくさのこい
 別所かといふ・わきとくさのこい・わきとくさのこい・わきとくさのこい
 ありありとくさのこい・わきとくさのこい・わきとくさのこい・わきとくさのこい

寄何五

葉、洞川といふなりと流す也。今も此の川や猶昔
如し。山門乃てさつむもせむいよつちあする世々の洞川
河水のこゝめらるり・あふ隙をまゝ洞の川・せきこたふるを
ふの川・平川の志願はぬのもよくまひくゆる・川水乃
うといひらるり・山川のなまねにそくをきり・洞川社

[illegible]

寄例

[illegible]

青湖玉

卷之五

代大社 係河内・新田・新田・新田
河内・新田・新田・新田
河内・新田・新田・新田
河内・新田・新田・新田

بسم الله الرحمن الرحيم
الحمد لله الذي هدانا لهذا
الذي كنا لنهتدي لہ
لو اننا لم نكن من
المسلمين

そとてうへとて候とてなとててうへとて名はハ湖水のふ
にたれともふふとていひて泳ぐ其のふも一ちの浦ハ
うへとてうへとてのうへ一ちの浦ハいひていひていひて
あはれいひていひていひていひていひていひていひて
ハ我いより神のふもてて泳ぐさういひて泳り
さういひて泳りて泳りて泳りて泳りて泳りて泳りて
又いひて泳りて泳りて泳りて泳りて泳りて泳りて
うへとてのふもてて泳りて泳りて泳りて泳りて泳りて
うへとてのふもてて泳りて泳りて泳りて泳りて泳りて

舟浦也

舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也
舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也
舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也
舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也
舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也
舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也
舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也
舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也
舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也
舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也舟浦也

又我いよりとて候とてなとててうへとて名はハ湖水のふ
にたれともふふとていひて泳ぐ其のふも一ちの浦ハ
うへとてうへとてのうへ一ちの浦ハいひていひていひて
あはれいひていひていひていひていひていひていひて
ハ我いより神のふもてて泳ぐさういひて泳り
さういひて泳りて泳りて泳りて泳りて泳りて泳りて
又いひて泳りて泳りて泳りて泳りて泳りて泳りて
うへとてのふもてて泳りて泳りて泳りて泳りて泳りて
うへとてのふもてて泳りて泳りて泳りて泳りて泳りて

ふねと海士の神をせり一すの神と一海すの神又
侍るも用ひたり一これ侍人の心ありあはれに
ふふふり一この心侍にあらん意にあらん
一すの神侍に侍るふり一すの神侍に侍るふり
ふふふり一これ侍人の心ありあはれに

寄附金

謀りて海士の神をせり一すの神と一海すの神又
侍るも用ひたり一これ侍人の心ありあはれに
ふふふり一この心侍にあらん意にあらん
一すの神侍に侍るふり一すの神侍に侍るふり
ふふふり一これ侍人の心ありあはれに

寄附金

一すの神と一海すの神又

侍るも用ひたり一これ侍人の心ありあはれに
ふふふり一この心侍にあらん意にあらん
一すの神侍に侍るふり一すの神侍に侍るふり
ふふふり一これ侍人の心ありあはれに

寄附金

謀りて海士の神をせり一すの神と一海すの神又
侍るも用ひたり一これ侍人の心ありあはれに
ふふふり一この心侍にあらん意にあらん
一すの神侍に侍るふり一すの神侍に侍るふり
ふふふり一これ侍人の心ありあはれに

と一むらびに地入のさーとも強くおぼへに一任の者
ハ三番ふよせてきこく志とよみ又はひかゝる今にふまへし
の者さうくさうといふもまたよしなりさうくさういふのはよく
又我々も人々の心よりさういふことにもむづかしいも又若
のねとゆふなをうけてもさういふのもせぬもさういふ
ものもさういふものもさういふものもさういふものも
さういふものもさういふものもさういふものもさういふものも

齊石齋

[illegible]

寄沙燕

ちかぢりくると我ぢづのつれなさをとち・りよさし矢
 もぬり・あるといふ我ぢづのいとくさるんとも・う
 つれなさをとれるのちかぢり・ささひありとも
 我
 ちかぢりなれとて・ささひのちかぢりなるをさすこと
 ちかぢりなれとて・ささひのちかぢりなるをさすこと

寄嚴文

耕^今は、彼のような漢人よりも、のびることを許さず、
我々も、ふくらむ漢のまゝにふるをも及ばずとも、又我々
のいれた漢と、いふのちがひなるふくらむをも許さず

信太おのゝよりいふに、
あつてはよきことなれど、
我々いらすと云ふなりと云ふも
いふことも無き事。又人の心乃ちくつれたらんとす

寄市色

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

寄菴

行

壽

彩霞機とてさるものありは花のよとれぬゆゑとて明な

或いは...
ぬき...
あつ...
別...
又...
其...
此...

寄...
...

...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...

寄...
...

...
...
...
...

寄...
...

...
...
...
...
...

しうふちとてりてまふち

寄屋

あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち

寄屋

あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち

寄屋

あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち

あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち

寄屋

あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち

寄屋

あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち
あふちのふちのあふちふち

しつゝもあはれもひらきまゝの山を渡るも

寄家書

[illegible]

寄懷

[illegible]

齊國

[illegible]

かゝるもの

寄藤花

藤花中絶つては、
て・かゝる藤花は、
といふ・又中絶の

寄藤花

夫れは、
といふ・又中絶の

漢方本草

寄草花	寄初草	寄忘草	寄思草
寄片草	寄下草	寄葛草	寄思草
寄荻	寄荻	寄蔞	寄荻
寄菊	寄蘆	寄菅	寄荻
寄萱	寄浅茅	寄蓬	寄荻
寄蘋	寄藻	寄沼繩	寄荻
寄秋冬	寄竹	寄木	寄荻
寄藤花	寄内花	寄紅紫	寄荻
寄椿	寄林	寄秋	寄荻
寄推	寄桂	寄橘	寄荻
寄枳	寄橘	寄楸	寄荻
寄宿木	寄塩木	寄埋木	寄荻

壽下草魚

寄筆

一ひとりの
 くらとくら
 くらとくら
 くらとくら

并寫補丸

寄瞿友直

我れをこの印までなす物家なりきと云ふ人こそ所也

寄菊

後を引けり人の心も自菊の心なりとてなれども
菊とすんまよふては菊の心なりとてなれども
と云ふもいづれなり又さういふ人の心なりとて
人の心なりとてなれども又さういふ人の心なりと
てなれども又さういふ人の心なりとてなれども
の心なりとてなれども又さういふ人の心なりと

寄草

後を引けり人の心も自草の心なりとてなれども
草とすんまよふては草の心なりとてなれども
と云ふもいづれなり又さういふ人の心なりとて
人の心なりとてなれども又さういふ人の心なりと
てなれども又さういふ人の心なりとてなれども
の心なりとてなれども又さういふ人の心なりと

寄薦

後を引けり人の心も自薦の心なりとてなれども
薦とすんまよふては薦の心なりとてなれども
と云ふもいづれなり又さういふ人の心なりとて
人の心なりとてなれども又さういふ人の心なりと
てなれども又さういふ人の心なりとてなれども
の心なりとてなれども又さういふ人の心なりと

寄菅

後を引けり人の心も自菅の心なりとてなれども
菅とすんまよふては菅の心なりとてなれども
と云ふもいづれなり又さういふ人の心なりとて
人の心なりとてなれども又さういふ人の心なりと
てなれども又さういふ人の心なりとてなれども
の心なりとてなれども又さういふ人の心なりと

思ひし人の心はしきり

寄若菜

猶ほ誰かといふことすもふれん人かまの「おひめ」
花の「おひめ」花の「おひめ」……
やういふも……おひめ……
……
……

寄葛衣

新拾人……
……
……
……
……

寄萱衣

……
……
……
……
……

寄漢茅衣

……
……
……
……
……

Handwritten text in the upper section of the first page, consisting of several lines of cursive script.

Handwritten text in the lower section of the first page, continuing the cursive script.

Handwritten text in the upper section of the second page, consisting of several lines of cursive script.

Handwritten text in the lower section of the second page, continuing the cursive script.

Handwritten text at the bottom of the second page, possibly a signature or a concluding line.

Handwritten header in Persian script.

...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...

Handwritten header in Persian script.

...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...

齊惠之

漢は
 ナラサヤの杯やどのを乃酒とてうけりも、
 日 所りのまゝ此のまゝとてあつた邊よと云く、
 芳馬急におなりとてわろをさき一其かえあるとありけれど
 もらひ入谷迄もさし知無きのをもこりり

年德

新撰の我道とてなるものなりとて人々を驚かせしは
 江戸の町にわたりてゐるものなりとて人々を驚かせし
 江戸の町にわたりてゐるものなりとて人々を驚かせし
 江戸の町にわたりてゐるものなりとて人々を驚かせし
 江戸の町にわたりてゐるものなりとて人々を驚かせし
 江戸の町にわたりてゐるものなりとて人々を驚かせし

寄雅志

新漢書卷之八

[illegible]

寄郭乞真

[illegible]

・其小人からあつてきくは……・さうさ……
とてれとあつて……

寄水鷗也

新秋の……水鷗……
人……の……
人……
……
……
……

寄一色

……
……
……
……

……
……
……
……

寄鷗也

……
……
……
……

寄鷗也

……
……
……
……

寄鷗也

Handwritten text in a cursive script, likely Persian or Arabic, arranged in approximately 12 lines. The text is enclosed within a rectangular border. The script is dense and flowing, with some characters appearing to be stylized or abbreviated. There are some faint markings and possibly small annotations or corrections interspersed within the main lines of text.

Handwritten text in a cursive script, likely Persian or Arabic, arranged in approximately 12 lines. The text is enclosed within a rectangular border. The script is dense and flowing, with some characters appearing to be stylized or abbreviated. There are some faint markings and possibly small annotations or corrections interspersed within the main lines of text.

一、
 二、
 三、
 四、
 五、

寄 楊 公
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、

寄 楊 公
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、

寄 張 公
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、

寄 張 公
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、

あはれいふ。人なづかぬにあらはれんとぞいふまじ。されぬ面影より
あはれこの時ふとも。中流に舟をゆきぬ。されぬ面影のまじりぬ。
人も。人づれをさるれても。されぬ面影と。いふふ。いふとも。
面影のまじりぬ。されぬ面影と。いふふ。いふとも。
——ちよとも増し

寄夢

金葉のまじりぬ。されぬ面影と。いふふ。いふとも。
うづのまじりぬ。されぬ面影と。いふふ。いふとも。
されぬ面影と。いふふ。いふとも。
——ちよとも増し

——ちよとも増し
あはれいふ。人なづかぬにあらはれんとぞいふまじ。されぬ面影より
あはれこの時ふとも。中流に舟をゆきぬ。されぬ面影のまじりぬ。
人も。人づれをさるれても。されぬ面影と。いふふ。いふとも。
面影のまじりぬ。されぬ面影と。いふふ。いふとも。
——ちよとも増し

寄夢

あはれいふ。人なづかぬにあらはれんとぞいふまじ。されぬ面影より
あはれこの時ふとも。中流に舟をゆきぬ。されぬ面影のまじりぬ。
人も。人づれをさるれても。されぬ面影と。いふふ。いふとも。
面影のまじりぬ。されぬ面影と。いふふ。いふとも。
——ちよとも増し

27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533
 534
 535
 536
 537
 538
 539
 540
 541
 542
 543
 544
 545
 546
 547

寄賢堂

沈々考或へくろくものされてある。つてもくねく
 せくしゆきんせきくろくものよりてまじ。其の如く
 人の心はそれより。ちろくしゆきんせきの如く。又く
 りくねいなりともくねくせきくろく。

寄髮

勢冬 かくしつまつ山のも枕まつもらとてふ所をせん
ひらくひらくをし流りうてまゐるるといふ路ありてまゐる

らうけとわれぬ。むろくけとむろくけ
かとし又万葉まむろくけとむろくけ
しうけとむろくけ

寄印結集

[illegible]

寄枕五

中説「あゝも花の鳥をみんかきうさうらん花へ」まう
花の鳥とまうくしよとありな今ま鳥とては花をみせぬ
りうをみんのかきうらんけきうなり色鳥の心へ
あまも・いかにんかきうれも花をみせぬ花をみん
花より又知人もかきうとて花より人まうもの花も

卷之四

青田の石

長久保の物に於て、
社長のなとて

...

とらふ
りまふ

に夢・トハものじもふ契・人まゐどられぬも其不・其
トハ・オのトハも・う長わゆふいかなしむ・ちて

寄諸公

[illegible]

齊景公

[illegible]

ありてはあり
いふとてはあり
おもひてはあり

飛びうととふりもめひえん
うととふりもめひえん

ぬさちのひさむつらなむてりてり
 まの明神のまの

二五

くさくさのきりぎりす。うらやま。うらやま。うらやま。うらやま。

[illegible]

其水・之何ぞあひのゝ結ひ
 結の所たゞとてすゑに
 ちやと事くせしけりとも

あゝいふさふの事
人よ色を

[illegible]

宋書

[illegible]

美の下の下

○
○
○

寄徐廷

寄錦衣

後林
しむ
人々れぬ所のをわづあふきむと名やせむとてん

海ふくみ川といふ初縁かれへうううささふうり人といひさ
 川をいへりえなまこのま乃うううささかともつゝさ
 へと種はくれなゐの川のうらと又お葉のうささと後うささあり
 くれなゐのうささささよ

新松（カサレ）君よりふひはあひるに我無のころいもうたれおの細な
 夢希無大祚々のほそぬ乃ふりせてひはあひてこもむはあん
 へんいよひのくさきと細のしひあひくるさきとせうり
 ねふのせ布をゆきまめいとすも
 ねふの細布へ寄林良枝ニ云真意なりむさうせバ
 布入ふ公袂の字の整えセグーとうむなかれ
 さ整えと訓とりて々々おせお布といかり又ほそ布ともいふかふかに
 己の名をつまねありおきつりくじまあひくることと云ふ布のつぎで
 りせらるゝゆきさうろかりふさくこれともちやぐさうねさうりて
 ちはあひさきとへいやく

寄拂以志

耕^ハ
手^ノ足^ヲ
五^ノ六^ノ七^ノ八^ノ九^ノ十^ノ十一^ノ十二^ノ十三^ノ十四^ノ十五^ノ十六^ノ十七^ノ十八^ノ十九^ノ二十^ノ

花のうとく母はなごりてりやふか
 うんごさりあつし一り方おと云
 あつしうつしうとのとすつ母・あつし
 又船真珠の初かうとふうとて・お母はものしりやふか
 後さうれは・とあれさやとたれぬ・一り方おと云
 てたつしうとて・あつしうとて・あつしうとて
 うつしうとて・あつしうとて・あつしうとて

寄揮毫

彼方まで来るにそれと解さすれぬ今更とて
 も後にもして中舟のさけのうもあはる。うもあ
 のうもあはる。早船するにうもあはる。うもあ
 のうもあはる。早船するにうもあはる。うもあ

哥

美林
喜
いづるをどうもいづるから花さすも山のどてをき

うらとていけちもあはれ
ゆのたとへ舟今くらとていけ
ちり多きなり舟今くらとていけ
自中なるなりぬれぬ。波するじとる舟人のいされ
とてさぐさぐさく。うら舟の中よりあはれさくさく
とてさくさくさくさく。わが色の
いられさくさくさくさく。

寄懷

新撰このまじれとうづぬとあうにけりふくゝ愛り
れ　　のふくもあらんとおも・わ毎の月の人
とも　　身のすなはせしとてやるもの・わ毎のふか
とね　　あらう　　は神さまのやい・わ毎のさやうにな
ちひさし

穿破魚

福林 くらぐらぬ所とのうはれなりまゝさうに合ふにれ
 ちてをいふのうらて合ふとむじともいふかたさう

これいさうのまゝかゝるゝのまゝに
 ゆかりあふりて
 夕方のちりてかきしつゝ
 日
 これいさうのまゝかゝるゝのまゝに
 夕方のちりてかきしつゝ
 日
 これいさうのまゝかゝるゝのまゝに
 夕方のちりてかきしつゝ
 日

ほ乃アとと種目録

何方	何在	喜志	佳色	秋色	喜色
佳趣	朱遍	未飽	晴天	夜浴	
簷外	戸外	遠山	遠水	遠村	
遠樹	笛客	行客	笛音	憶昔	
秋近	近枕	逐年	逐年	逐年	
送年	度年	積年	經年	多年	
契齡	争齡	終齡	西方	逐日	
連日	終日	終日	明月	明月	
寄月	映月	映月	映月	到曉	
每朝	晚以	薄暮	連天	逐夜	
每夜	重夜	暗夜	連夜	深更	

んね・ひまわり・いらね・あもあね・いらねも
 なも・雪の山でやまはたけ・こもこもあね・やも
 さもあね・いらね・いらねの山・いらねの山
 いらね・いらねの山もいらねと云・其外我れ清雪
 いらね・いらねの山もいらねと云・其外我れ清雪
 いらね・いらねの山もいらねと云・其外我れ清雪
 のんと・いらねの山もいらねと云・其外我れ清雪

朝
何
方

修志

水鶴何

卷之六

鹿角何名

白門上

新何

卷之四

福至

...

何任

所花何右のふくみ

[illegible]

書卷之五

死下意 憶牛女意 月並意のうゑ

言忘ハ其物ヲ射テ大ニあてもむ事ありといふのうたひなり

福

天下言志

今あれをききわかれとてふりの心なかりけ

後人

七々々々の衣と引くとほくふてあやこゝいなるひ

新張

卷之五

佳色 歡色 喜色

花有佳色 花有穠色 花有奇色 のんくひし

佳色はうららかに歡喜色はよろこびのちをうらむも
よき事なりとてうらむとてうらむとてうらむとて
せのち・よろこびのち・喜とてうらむとてうらむと
おかし

齊

藝有佳者

養有散色

若有喜色

多きて先んくは花の香をふくみしり
枝をふくみしり花をふくみしり
花をふくみしり花をふくみしり

佳趣

水樹多佳趣
禁中佳趣のどなく

佳歌ふとてりじとてなふても無難を對してうらふと
りじさのあらんとてし又もそ万代の秘の心といひもね
るあや

茶

工部

興

上とせむらもふのんりともく代竹の松のまき所
 のきの葉ろくれ竹ゆれも流く海と夢うたあり
 花東遍ちと来遍お集来遍のれし

米通や、よ、箱の分量、てい、い、ち、五、分、五、十、分

子方長く各其職中よりて類々之——これ等

和もさうしてそのんちうてふむさへ或ハ輕々

とらふはやくとて次のを所社におきてつ

人ありては人ありといひ又さう云ふ

いふまでもなく、雪もあるより、たとへば、
雪うへは、
言れども、

亮一、或の如し、格子、喰ひし、枝、の、こ、こ、下、り、枝、葉、

此の如きなりとも又山のさうは多うなり小いやまへ

一木未唯ねれとてふ
あまのこころを
かへしめよ

くう快見よりし世とをさうてあみちよとついのし
しよと又その世のれとすしよりしんもよりあむ
すふく痛くし世のやうさ快見の雲とすずんい
なりけしひちくわ

[illegible]

をいふふかき一海老の事をとて能くし或はこゝの
舟のてゑの浮城とせり。入日の朝のてゑて海老とせり
といふ。こゝろをて入舟の朝まのりくを海老のてゑと

[illegible]

遠村

走村霞

きりぎりすをたづねてふ

を村ハをの二村ニ 一の村ハをの二村ニ
又村といふも一をの二村ニありてをの二村ニありて

[illegible]

そとと世との我と人との氣を亂し樹木澁木のことと云つれども
よくしつゝ又世といふり處ても旅なり或ハこのふの松林の松
浦をさへ旅の松と云ふの松其か名にそへて世をさへしつゝ
しつゝのふの松と云ふものなりそへて世の松と

きくるとも傍り

電隔遠樹
竹石
雪釣古木
後山の松

うらにけりる松の乃今雪とれと海山の松なりけり

留客 ルカキ
 留人 ルカキ
 花夢 花夢人 時与夢 花夢人のこころ

苗客苗人なり客はわがわが人ともいひ又我身と客
 小なりとも客とともハ苗客といふ我者の心なり人
 といふ人とも客といふ人といふ又我と客なり
 ていつかしの我といふふくさるなりくまふなりと
 りハわが又時をたていつ我といふ時なりと客といふ
 ひといふ人なりといふ人といひ又我といふ客なりといふ
 のなりといふとて今上客のころなりと客なりといふ
 みておけし

花田客

五

廣教篇

郭

五

九

行客

て

卷之五

因路

行

行客

樹
音

對花書對梅同書對月書

こいしとふじうたなひう又我のひうも

トウじと忍びのふとあとも

我、うんざりしてゐるじやないのやと云

一、（此の條は）
二、（此の條は）

造器事 受命于天 好方之卜 乃其 乃其

憶奇

去月懷昔 對月懷昔のそいし

青々たるきのひーとくー我々のひーヌバひーとく人の

りてんとひつるん其のたをしてもじうあにももど

といひてん我の道とありて夜ふじにみえ

[illegible]

天長元年

符ふ明くお前の枕友さじなとらんかなんぞ

萩音近枕

聖近枕

鶴音近枕

「秋をこ枕は近き聖なるかなんぞもあらねばいれ
深き夜のおの枕の枕友と誰さうそつるは明ん

逐年

逐年枕盛逐年花盛のこころ

逐年枕盛

「いそともさねはじは味も有るくはむありやいそ

逐年枕盛

「老ねれなとらんの花をさるるのこころはむとらんハ

逐年

竹製逐年枕盛逐年のこころ

竹製逐年

「交際の乃いふやれ竹のうのうとをくゆて

松製逐年

「今年より竹よりさき松の本の心のおくをさるるこころ

巡年

花巡年友竹巡年友松巡年友

「巡年いこれ年久しきんぞたけ

花巡年友

「望ありて位をさるるの心なればさき世の事をさるるせん

竹巡年友

「うてさるるの竹よりさき世の事をさるるせん

松巡年友

「花代よりさるるの心をさるる松の心をさるるせん

送年

丹世送年 宝島送年 田原送年 のおに

「校年とらんことんハ所世送年ハ世の心お校年おらん

「かんねらんとらんハ世の心お校年おらん

「せよてハ校年おらんハ世の心お校年おらん

「こころハ校送年といふハ世の心お校年おらん

「送年ハ世ハ校年といふハ世の心お校年おらん

「さるるは校年といふハ世の心お校年おらん

「ハ一時代といふハ世の心お校年おらん

萩音近枕

竹製

田家送年ハウリヤラるの事ハ作られて善哉の玉川クモ
ウケレタラユ一又長島の里ハむらびのさきハ里ホリ決られ
一ムルナレハ善哉の田のモハ善哉ハ一トヤ長島の里
又ハシカ川の里ハ善哉ハ送年ハムカヒ

井越送年

家送年

田家送年

度年

梅度年

香度年

香度年

香度年

香度年

松積年 井越積年

梅度年ハ冬ナリまゝなて候とて送年ハ一トヤ長島
香度年ハ一トヤ長島の里ハむらびのさきハ里ホリ決られ
香度年ハ一トヤ長島の里ハむらびのさきハ里ホリ決られ
香度年ハ一トヤ長島の里ハむらびのさきハ里ホリ決られ

年々ハ冬ナリまゝなて候とて送年ハ一トヤ長島
香度年ハ一トヤ長島の里ハむらびのさきハ里ホリ決られ
香度年ハ一トヤ長島の里ハむらびのさきハ里ホリ決られ
香度年ハ一トヤ長島の里ハむらびのさきハ里ホリ決られ

井越送年

度年

梅度年

香度年

香度年

香度年

香度年

積年ハ一トヤ長島の里ハむらびのさきハ里ホリ決られ
香度年ハ一トヤ長島の里ハむらびのさきハ里ホリ決られ
香度年ハ一トヤ長島の里ハむらびのさきハ里ホリ決られ
香度年ハ一トヤ長島の里ハむらびのさきハ里ホリ決られ

契契

多幸致物
松竹延年
松竹延年
松竹延年

鶴の千年の人のよいいとかをくちかきく又かきくハカキ

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

鶴の千年の人のよいいとかをくちかきく又かきくハカキ

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

鶴の千年の人のよいいとかをくちかきく又かきくハカキ

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

鶴の千年の人のよいいとかをくちかきく又かきくハカキ

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

鶴の千年の人のよいいとかをくちかきく又かきくハカキ

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

鶴の千年の人のよいいとかをくちかきく又かきくハカキ

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

鶴の千年の人のよいいとかをくちかきく又かきくハカキ

鶴の千年の人のよいいとかをくちかきく又かきくハカキ

つれもいくしせうらんまておけくし多幸致物又のく

鶴の千年の人のよいいとかをくちかきく又かきくハカキ

野素延壽 何のいふものをも早の老なる人のいふこと
根絶絶交 こといふものが松くも実もあらずと断ずるものとあはれ

両二方

両方すれども 両方ある 両方ある

あつた式に挑むるはより こといふなり こといふなり
こといふなり こといふなり こといふなり こといふなり

両方すれども

何のいふものをも早の老なる人のいふこと

両方すれども

何のいふものをも早の老なる人のいふこと

逐日

逐日着衣 逐日草履 逐日書信 逐日洗濯 逐日洗髪 逐日洗足 逐日洗面 逐日洗身 逐日洗心 逐日洗性 逐日洗命 逐日洗魂 逐日洗魄 逐日洗精 逐日洗神 逐日洗靈 逐日洗氣 逐日洗血 逐日洗肉 逐日洗骨 逐日洗髓 逐日洗腦 逐日洗心 逐日洗性 逐日洗命 逐日洗魂 逐日洗魄 逐日洗精 逐日洗神 逐日洗靈 逐日洗氣 逐日洗血 逐日洗肉 逐日洗骨 逐日洗髓 逐日洗腦

あつたのいふものをも早の老なる人のいふこと
あつたのいふものをも早の老なる人のいふこと

連日

連日着衣 連日草履 連日書信 連日洗濯 連日洗髪 連日洗足 連日洗面 連日洗身 連日洗心 連日洗性 連日洗命 連日洗魂 連日洗魄 連日洗精 連日洗神 連日洗靈 連日洗氣 連日洗血 連日洗肉 連日洗骨 連日洗髓 連日洗腦

あつたのいふものをも早の老なる人のいふこと
あつたのいふものをも早の老なる人のいふこと

光霞映日
所乘舟中
子集映日

柏王

卷六

卷下

卷四

寄

聯力

月映花 花之映月 花月映泉 野秀映水 のころ

舟映影

二 卷 集
美之映

夏正映象

いづれかたきとていづれかたきとていづれかたきの心を
月夜の光のような情をこめていづれかたきを
石の山いづれかたきの心は情をこめていづれかたきを

野々原

いづれにあらんかと思ふに、その心は、
いづれにあらんかと思ふに、その心は、

曉文

四季諸歌は、

曉天

曉天、曉天、曉天、

天のまゝに、いづれにあらんかと思ふに、
いづれにあらんかと思ふに、その心は、

曉天

法抄、

曉天

花のまゝに、いづれにあらんかと思ふに、
いづれにあらんかと思ふに、その心は、

到曉

曉天、

曉天

いづれにあらんかと思ふに、
いづれにあらんかと思ふに、その心は、

曉天

有明のまゝに、いづれにあらんかと思ふに、
いづれにあらんかと思ふに、その心は、

曉天

いづれにあらんかと思ふに、
いづれにあらんかと思ふに、その心は、

いづれにあらんかと思ふに、
いづれにあらんかと思ふに、その心は、

曉天

いづれにあらんかと思ふに、
いづれにあらんかと思ふに、その心は、

曉天

いづれにあらんかと思ふに、
いづれにあらんかと思ふに、その心は、

天のまゝに

八の字

八の字

八の字

八の字

八の字... 八の字... 八の字...

八の字

八の字... 八の字... 八の字...

八の字

八の字... 八の字... 八の字...

八の字... 八の字... 八の字...

八の字... 八の字... 八の字...

八の字... 八の字... 八の字...

八の字

八の字

八の字

八の字

八の字

八の字

八の字... 八の字... 八の字...

八の字... 八の字... 八の字...

ふんふん風の鳴るはしりたりもかおの鳴るはしり
今更の清く曇りて清くは曇るふんふんおきく

旅泊室夜

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

旅泊室夜

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

旅泊室夜

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

毎夜

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

旅泊室夜

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

毎夜

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

毎夜

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

旅泊室夜

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

旅泊室夜

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

毎夜

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

「おとろい旅泊とていふはさうなれはしり」

出猶秋来

出猶秋来

出猶秋来

出猶秋来

出猶秋来

あつちのぼらふふきもくはのぼのつら
うまきれはるは梓屋のむもきくはれは
たりうおきくはるはやあのおきくはれは

あつちのぼらふふきもくはのぼのつら

うまきれはるは梓屋のむもきくはれは

出猶秋来

出猶秋来

あつちのぼらふふきもくはのぼのつら

うまきれはるは梓屋のむもきくはれは

たりうおきくはるはやあのおきくはれは

出猶秋来

あつちのぼらふふきもくはのぼのつら

出猶秋来

あつちのぼらふふきもくはのぼのつら

うまきれはるは梓屋のむもきくはれは

たりうおきくはるはやあのおきくはれは

あつちのぼらふふきもくはのぼのつら

うまきれはるは梓屋のむもきくはれは

たりうおきくはるはやあのおきくはれは

出猶秋来

出猶秋来

出猶秋来

出猶秋来

あつちのぼらふふきもくはのぼのつら

山中

あつちのぼらふふきもくはのぼのつら

あつちのぼらふふきもくはのぼのつら

あつちのぼらふふきもくはのぼのつら

山平之次
玉此
山平月
彭彭
山平月
林云

第五

吳郡
郭弘

野

宣山先生集

雪山
月夜
月夜

王聖

雲南那山

連案

音のつとまもてきつなりといひつくさふこのものな
てりいせむるものもあり又・考どもいゝまゐりかたてゝ

連峯つらぎ

連峯つらぎ

連峯つらぎ

洞底ほらぞ

洞底ほらぞ 洞底ほらぞ 洞底ほらぞ

凡洞の字永め谷とふく洞の字水とふく
とくた神谷の水ひり水谷川の水とふく
谷の字いふてんかー谷とふく

洞底ほらぞ

洞底ほらぞ

洞底ほらぞ

とりく谷とふく
とくた神谷の水ひり水谷川の水とふく
谷の字いふてんかー谷とふく

洞底ほらぞ

洞底ほらぞ

とくた神谷の水ひり水谷川の水とふく
谷の字いふてんかー谷とふく

洞底ほらぞ

洞底ほらぞ

洞底ほらぞ

凡洞の字永め谷とふく洞の字水とふく
とくた神谷の水ひり水谷川の水とふく
谷の字いふてんかー谷とふく

洞底ほらぞ

室師ハ喜林冬もあつた歌ハ喜林冬もあつた
うそでしむし林やうく喜林冬もあつた
ふとていふおとむくかかんおけ

喜林冬
喜林冬
喜林冬
喜林冬

あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた

野亭

野亭

野のいかりくさの屋・くさの屋・くさの屋・くさの屋
うりいかりくさの屋・くさの屋・くさの屋・くさの屋
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた

野亭

あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた

海上

海上川上池上水上に上京上庵上
上の字はくさのもやうのくさの屋・くさの屋・くさの屋
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた

海上

あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた

海上

海上

あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた
あつた喜林冬もあつた喜林冬もあつた

海上

海上

うしろのやまといふは好ましくいふはまゝといふはた

屋上雨

屋上雪

松上

馬

松上雪といふは松の上の雪をいふ。馬といふは馬の上の雪をいふ。

松上

馬

松上雪といふは松の上の雪をいふ。馬といふは馬の上の雪をいふ。

馬

馬

海邊 湖邊 河邊 池邊 池邊 池邊

琉

琉のまはられも虚字く海上湖上などかきまはれ一

仲まをなれていふ所あるは或は浦のまをなれと
と流り名はハあら流りいも流り。うゑいひの流りといふ
あり其おひく何流りかへらくも流りといふ何流りか
といハ流りまはれ又ハ十流りともふ

流

流

流

左

左のまはれハ後より後より又名はのまはれといふ

又名はのまはれハ後より後より又名はのまはれといふ

流

舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

古渡 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ
古渡 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ
古渡 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

古渡

古渡 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

古の字んれ一はとてお叶いしはの池なり ありこれ

つくれもあれ言はまいうるの池なり ありこれ

古渡 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

古の字んれ一はとてお叶いしはの池なり ありこれ

古渡 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

古の字んれ一はとてお叶いしはの池なり ありこれ

水路

水路 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

水路 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

水路 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

水路

水路 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

連辰

連辰 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

連辰 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

連辰 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

連辰 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

連辰 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

連辰 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

連辰 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

連辰 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

連辰 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

連辰 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

連辰 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

連辰 舟よりいれぬすゝの舟とよふ人といふ

庭樹を伴はばの程に思ふもあらうとふくみいへるも
あつて沈みまゝにうへへ

きげ月
庭樹を伴はばの程に思ふもあらうとふくみいへるも

凡前

凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前

凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前
凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前

凡前

凡前

凡前

凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前

凡前

凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前

凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前

凡前

凡前

凡前

凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前

凡前

凡前

凡前

凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前凡前

凡前

凡前

かのみすくわ〜のまゝをたけ

二つ世縁 くのり〜路よくのり〜なをまほむのまゝ

松司 松司なる所のいふ

松司の松 松本〜の〜松〜ハ松のまゝ
松のり〜松のり〜松のり〜松のり〜松のり〜

松のり〜松のり〜松のり〜松のり〜松のり〜

松のり〜松のり〜松のり〜松のり〜松のり〜

杜間 杜間なる所のいふ

けらの字も〜杜間〜杜間の〜杜間の〜
けらの字も〜杜間〜杜間の〜杜間の〜

松のり〜松のり〜松のり〜松のり〜松のり〜

松のり〜松のり〜松のり〜松のり〜松のり〜

竹間 竹間なる所のいふ

竹間 竹間なる所のいふ
竹間 竹間なる所のいふ
竹間 竹間なる所のいふ

竹表 竹表なる所のいふ

表中ともふ〜竹表なる所のいふ
表中ともふ〜竹表なる所のいふ

翠柳誰家
遠矣誰家
如衣誰家
樗誰家のこゝへ

是と名付ともいふをひなしてお叶

抄

おなまの美のやとりやそれなりともの祈さへお

懷秋

のそなう情に極の白い外これ我々の心と云ふ

史木

たふさふさいけのふとふとてきふふのふと

五

あふふやとふくくと知ゆとも云ふ事なり一歩あり

竹草園寫 竹草ノ夏來のそとひ

竹亭のふか草は竹・竹の下は竹・まふとの竹・竹のまふ
 草の竹なしとてお叶い

致

新道を修む所の地を以て山と爲る

作

足より、防々格と形近き竹の森系に、

卷之四

五柳堂古柳堂のくまひ

たさきよりくねりてよりともよみ又近形恒係をよみて
もお叶吉の字のん六奉よりくねりあれりふそそりあふ
或よりくねりて恒ね・もしんもあふりなまり・これす
・ささきよりくねりてよりくねりて恒ねをよみてい

vi.

中

五

とてこれれを参のつをきいて

1

[illegible]

2

教のそとへ

下の子の初おまわり

さうさうちよく教のまのちいさなやうにうたわれ

三才のついで

下五まんねんしんきとよまふた叶

唐の世とあるは意の多岐なりを指し示すなり

古屋二 荒室二 荒屋二 古宅二

とれもんがけしうりくるまをまねたりて

新・あけしやと・ちきりて・うきや・あゝらるゝあ

のうへは。あつちまのうへへうへへ

[illegible]

いふまでものなりと云ふ人 抑えたる世の内執

ハシヤノミナモトノ山ノ人ヲモシヤ秋ハスアリ

きなりぬし母子の家の前平いそとまのちやくらぬ

新々々々

春上陸のそとへ

喜上階とハ喜のうへにハ喜・喜を返す・喜のと

かん・かきのみかきまき道くらんかきまきお叶

又よりやいふ山ありと太くとまの隣のいすれ

又思思不窮のこゝろ

思ふよりたゞ思ひ入る或ハ思ふより又思ふより

と云ひ或は主君の爲にまじりと云ひ又つくと云ふのこゝ

あまのうみとてふは又くうきんせいの

[illegible]

二ウとぬいしと云ふは、
たゞの文句に過ぎず。

今も又なまなりぬ美しきものどもをせめぬの平

人づゝ我々をかういふといのせこよみうゑとて

夷のちてて推

卷之四

出情

月可出情 蜀中出情のいふ

こころの情に思ひあはれし月可出情のいふ
のいふこころの情に思ひあはれし月可出情のいふ
のいふこころの情に思ひあはれし月可出情のいふ
出情に蜀中出情のいふのいふのいふのいふ

蜀中出情

旧情

月可旧情のいふ

月可旧情

遠情

月可遠情のいふ

を思ひあはれし月可出情のいふ
のいふこころの情に思ひあはれし月可出情のいふ
のいふこころの情に思ひあはれし月可出情のいふ

月可出情

月可出情

月可出情

月可出情

月可出情のいふ

のいふこころの情に思ひあはれし月可出情のいふ
のいふこころの情に思ひあはれし月可出情のいふ
のいふこころの情に思ひあはれし月可出情のいふ

月可出情

月可出情

月可出情

月可出情のいふ

のいふこころの情に思ひあはれし月可出情のいふ
のいふこころの情に思ひあはれし月可出情のいふ
のいふこころの情に思ひあはれし月可出情のいふ

月可出情

月可出情

[illegible]

惜
雲
飛

忠孝堂

忠信

一

耕

三子

を述べるに近林は、を述べるに、
を述べるに、を述べるに、

ものゝ成り・・・もろもろの所
ケしより合てを近と

りてり其を改めたるなりとて

卷之五

上海人民出版社

王近丁

子孫之世貴族之衣量衣之數以之

軒

きけのふ・くさやしも・うもあはせ・えんふ

たのしみは、さうでもよい。たゞ、これく
わきま、さうでもよい。たゞ、これく

一、又所の？何意なるか。世に

そのまゝに多くの種を採集し、その多くは、

王

五

日 天武天皇十三年乙未秋八月己未朔甲子
都鄙 都鄙主事都鄙主事都鄙主事都鄙主事

・都鄙主事・九等の内もとも・むのふたもあつた

都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事

都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事

都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事

都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事

都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事

都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事

都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事

都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事

都鄙主事

都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事

都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事

都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事

都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事 都鄙主事

元禄十丁丑歲霜月吉辰

書林

中野六右衛門

（Faint vertical text, likely bleed-through from the reverse side of the page, including characters like 中野六右衛門 and 書林）



